

〈書評〉

花岡秀監修 藤平育子・中良子編著
『フォークナー文学の水脈』
(彩流社、2018年)

小 椋 道 晃

本書は、この度ご退職された花岡秀氏のこれまでの業績を称え、14名の執筆者が、それぞれのフォークナー読書体験をもとに、フォークナー文学と通底する作家や作品を読み解く記念論集である。表題にある「水脈」という比喻のしなやかさ、あるいは、のびやかさからも想像されるように、本書に収められた論考は、フォークナーとその他の作家との直接的な影響関係を厳密に跡づけることを必ずしも目指しているわけではない。むしろ、序章で花岡氏が述べるように、フォークナー文学を深く豊かな「水源」とし、そこから縦横無尽に浸透している様々な「水脈」とその「水質」を、各執筆者がそれぞれの方法で「調査」するのが、本書のねらいである。終章における平石貴樹氏の言葉を借りれば、各論の企図は、「『フォークナーを光源として別の作家を照射する、および（または）その逆』のいとなみ」（344）であり、したがって、各執筆者が比較的自由に作品と主題を選択し、それらを考究していく方法論こそが読みどころとなっている。それゆえ、その射程が多岐に渡ることは必然であり、またそれが本書の独自性でもあるため、以下、順を追って、各論文の内容を紹介していくことで、本書のダイナミズムの一端を理解していただければ幸いである。

第一部「南部の大地を貫いて」では、南部という空間にまつわる5編の論考が並ぶ。まずは千葉淳平氏が、しばしば比較されてきたフォークナーの「熊」

とメルヴィルの『白鯨』を改めてとりあげ、考察する。「熊」におけるオールド・ベン黒い姿に、モービー・ディックのみならず、エイハブの姿をも重ね合わせられている可能性をみる点が新しい。続く上西哲雄氏は、『ハックルベリー・フィンの冒険』と『八月の光』に共通する主題として、ハックとジョー・クリスマスの「優しさの拒否」を挙げ、トウエインの小説の根底には、南部バプテスト信仰に対する拒絶があるとする。フォークナーはそれをさらに突きつめ、南部のキリスト教批判を超えた普遍的な倫理の問題として提示したのだと読み解いてみせる。本書のなかで最も「水脈」的読みの可能性を示している論文のひとつとして、新田啓子氏は、フォークナーと同世代の黒人作家ジーン・トゥーマー『砂糖きび』をあわせ読み、両作家が創造する「南部」を鮮烈なコントラストとともにあぶり出す。氏は、トゥーマーが黒人（作家）という自己との断絶から出発し、南部という土地を創造するに至った経緯を提示するが、その根底には、「黒人の生命が、無条件に恐ろしく、肯定の余地のない死の体制である奴隷制をもものともせず繁殖し、引き継がれているという紛うことなき事実」があるとする（82）。つまり、トゥーマーの作品世界はそのような「黒人女の『子宮』」に立脚しており（84）、この「現実」は、実のところ、フォークナーにとっても認識されていたのだという。しかしフォークナーの南部において、黒人（女）の肉体というリアルは、彼の南部神話を浸食する「呪い」として否定的に実感されていた。続く二本の論文は、南部という土地の問題、あるいは「場所の感覚」に焦点を当てる。中良子氏は、ユードラ・ウェルティがフォークナーと親交を結んだ時期に書かれた短編集『黄金の林檎』を、登場人物の意識にとらえられた「瞬間的な土地の感覚」（103）という視点から考察している。というのも、ウェルティの場合、「土地の感覚が土着の定住者ではなく、旅する放浪者によって担われる」からである（107）。自らの属する土地の感覚に基づく想像力の重要性は、続く田中久男氏の論文でも強調される主題である。氏は、『土にまみれた旗』とレスリー・マーモン・シルコウの『儀式』をもとに、それぞれの作家の伝記的背景にみられる「癒しの儀式」という観点から考察したのち、より広く、両作家の「リージョナリストとしての想像力」の共通性へと繋げている。

第二部「南部からアメリカ表象に向かって」では、人種やセクシュアリティの視点を取り入れた5編の論考が配置される。ヘミングウェイとフォークナーを、ネイティブ・アメリカンの表象から検討する松岡信哉氏は、前者が人種変容の可能性を想像しながら、人種混淆の拒絶を描く「アクチュアルな想像力」を持つのに対し、後者は、歴史的起源における人種混淆を策定する「アボク

リファルな想像力」を駆使したとし、二人の作家の競合関係を精緻に紐解く。大地真介氏は、コマック・マッカーシー『老人の住む国にあらず』を、従来の定説とは異なり、フォークナーの影響下にあるとみなし、『サンクチュアリ』とのプロットや細部の類似性を指摘しながら考察する。そして、アメリカの国境をこえて複雑化する「南部」を描いたマッカーシーの想像力と射程の深さを明らかにする。続く坂根隆広氏は、一見すると具体的な土地というよりもそのファンタジックな虚構性が強調されたスコット・フィッツジェラルドの短編「リッツくらい大きなダイヤモンド」にも、南部という空間が回帰していることを読み解く。語り手であるジョンのリアルな身体感覚をめぐる議論は、短編の精読とともに説得力をもって提示され、南部のリアルな風景がジョンのトラウマの身体感覚と結びついていることを導き出す。舌津智之氏は、従来あまり議論されることのないアースキン・コールドウェルの短編作品群について、未発表のものを含め、その紹介を兼ねつつ、「欲望の主体として行動する女性、自らの性と身体に対して自己決定権を持つ女性の復権」を訴える「フェミニスト・コールドウェル」の再発見を促す（222、216）。そして、「草木とともにある南部を舞台に、十代の娘がみずからイニシアチブを取り、同世代の異性を官能の領分に導く」（227）構造を持つ作品群の叙情性を考察することで、性に目覚める少女と少年の叙情的な官能性と、暴力や排除を伴わないセクシュアリティのあり方に意識的であった作家像を提示する。諏訪部浩一氏は、リチャード・ライト『アメリカの息子』をノワール小説として読むことで、白人女性を殺して悔やむことのないビガー・トマスというキャラクターの「新しさ」——ライトが「ブラック・レイピスト」という黒人男性についてまわるステレオタイプの危険性を承知しながらあえてそのような人物を主人公に据えた理由——を考察する。ここで、ビガーが、ステレオタイプの黒人像を「踏み抜いて」、自らに起こった「偶然」を「必然」とすることにより、白人社会において初めて主体を確立することができたように、ステレオタイプのキャラクターの創造は、作者自身にとってもそのような社会への根源的批判を可能にした。この点に、ノワール小説が、「偶然に対して責任を持ってない」アメリカ自然主義文学と一線を画すという指摘は鋭い。

第三部「南部を超えて流れゆく」は、フォークナーから日本文学への水脈を探る後藤和彦氏、アルベール・カミュによる『尼僧への鎮魂歌』の脚本化を、原作小説と比較・考察する藤平育子氏、さらに、抽象表現主義の絵画論に向かう千石英世氏による3編の論考を含む。後藤氏は、『八月の光』のジョー・ク

リズムに表現される「混血」の主題——つまり、「恣意的に過ぎぬふたつの血のあいだの差異を融合不能の断絶へと、ただの偶然を必然へ、あるいは歴史的宿命へと読み替え、そのとおりに信じ込まねばならなかった、その特定の社会の、問題性」(270)——を踏まえた上で、小島信夫『墓碑銘』における「混血」の主題とは、小島が日本の戦後小説を考え抜くためのひとつの実験であったのだとする。藤平氏は、『尼僧への鎮魂歌』をとりあげ、カミュ版と原作、さらにはフォークナー自身による戯曲化版(ロンドン公演用)に書かれた、女優ルース・フォードとの共著版)との差異や共通点を詳細に検討することで、カミュからフォークナーを、そしてフォークナーからカミュを照射し、両作家の共振をあぶり出すことに成功している。とりわけ、ギャビン・ステューヴンズの役割を増幅したカミュは、罪の赦しや、人間の信頼と愛を原作よりも強調して翻案していることが示される。文学作品にとどまらない芸術におけるモダニズムの問題をも見通す千石氏は、美術評論家クレメント・グリーンバーグによるジャクソン・ポロックの評言をもとに、キュビズム(とはまさに旧秩序の崩壊の視覚化)の影響下にあるフォークナーのモダニズムへと思考を紡いでいく。モダニズム文学・芸術の斬新さとは、「旧理論の突然の終焉、旧世界の突然の崩壊」(333)が我々を震撼させるその効果であると述べる氏にとって、『響きと怒り』はまさにその達成でもあったし、それゆえ「切なさ」(316)を感得しうるのであろう。

さて、本書末尾を飾る平石論文は、小説を読む上でフォークナーが「座標軸の不動の原点」(337)であるとする氏が、他の小説を読む際にも「自然にフォークナーを思い出して」しまう(338)、その読書のありように重点が置かれる。そして、太宰治の『津軽』における、乳母(母)をめぐる作家自身のアイデンティティに関する「虚言」——登場人物たちの母をめぐる苦悩が、そのまま作家本人が同様の苦しみを味わっていたという保証はどこにもないこと——という厳然たる事実を導き出し、氏のフォークナーと乳母の問題に対するかつての解釈を修正する、ユーモアたっぷりの議論となっている。

クエンティンが自殺するチャールズ川であれ、『死の床に横たわりて』における洪水の川であれ、フォークナーの作品には川が流れている。そもそも、「ヨクナパトーフア」という地名自体が、作家自身が訪日時に説明したところによると、「水が平坦な大地をゆったりと流れる」というチカソー・インディアンという言葉であったことを思えば、彼のサーガとは、とりもなおさず、水脈的思考と親和性がある。フォークナー文学の「水脈」がいかに広く深く、文学のみな

らず芸術全般に流れ込んでいるか。このことは、各論が扱う作家、作品、ジャンルが多岐にわたることで証明されている。そしてその「水脈」には、地下深くにゆったりと沈滞する流れはもとより、大地を流れる大河の激しさもあれば、より身近で親密な小川を探索する楽しみもある。読者は、おのずから自分の愛好する作品にも、そのような流れを見出してみたくなる衝動にかられるだろうし、そう思われるという点で、本書の企ては成功していると言えるだろう。